

学力向上を目指し全校体制で取り組んだ4年間の研究
2017年（研究前）と2021年（研究後）の結果比較から8つの手立てを検証する

松崎 力

Matsuzaki Tsutomu

要旨

筆者が勤務した公立小学校（以下「当該公立小学校」とする）は、児童の学力向上を目指して、4年間の継続研究を行った。研究は、チーム学校としての意識改革、学年による到達目標の設定や発達段階を考慮した具体策の徹底、授業の10の原則等を用いた研修会の実施による授業改善、ICT機器を活用した授業の実践、児童全員が教材文を読めるようにする全校体制での取組等、8つの柱を中心に実践してきた。4年間の研究後、当該公立小学校のある市内で実施された統一テスト^①を用いて、研究前年の4・5年生と研究後の4・5年生の達成率を比較した。結果は、研究後の4・5年生は4教科全てで市内平均点を大きく超えることができた。研究前の4・5年生との比較では、2桁以上の向上を見た。これらのことから本研究が示した8つの手立ては、学力向上に寄与するという示唆を得た。

キーワード：チーム学校、学力向上、継続研究、ICT機器活用

I. 問題の所在

2015年に、当該公立小学校に赴任した。高学年を担当したが、赴任初日から担任する児童が禁止されている河川で遊んでいるという情報が近隣住民から寄せられた。まだ、新任式も行われていない春休み期間中での出来事である。当該児童とは面識がないままに、学校で決められた規則を守ること等の児童指導を行った。その日から、ほぼ毎日のように児童指導に追われる日々が続いた。これは、私が担当した学級だけの問題ではなく、全校的な傾向であり、配慮を要する児童を対象としたケース会議が毎週のように開かれていた。児童のトラブルは大変多く、保護者からの様々な要望や他団体との連携を余儀なくされるような事案も勃発していた。安定した学級経営を行うことが難しく、地区内外から困難な学校と揶揄されることもあった。

県内では、2014年から県版統一テスト^②を行っている。県内の悉皆調査であり、4年生と5年生が対象である。これを踏まえて、当該公立小学校のある自治体でも市内統一テストを秋に実施している。2015年から3年間は、学年主任としてこの調査を実施したが、結果は芳しいものではなかった。詳細は後述するが、市内平均点と比較して落ち込みが見られた。これらのテスト内容と普段の授業内容を簡単に比較することはできないが、テストの達成率の低さから考えると、日常の授業でも難しさを感じている児童が多かったと推定される。学習内容が分からないという状態は、児童に不安や不満を蓄積させ、そのことが原因となってトラブルに発展することも多々あったであろう。

赴任から4年目の2018年、学習指導主任として学校全体を取りまとめる立場になり、学校改革へと着手することとなった。研究をスタートする前年の統一テストの結果では、

市内の平均達成率を大きく下回っていた。この現状を変えるために、チーム学校として4年間の継続研究をすることとなった。

Ⅱ. 研究の方法

1. 研究の対象

- ①対象児童 : 当該公立小学校校
研究前児童 2017年度4年生(94名)・5年生(96名)
研究後児童 2021年度4年生(78名)・5年生(81名)
- ②対象テスト: 市内統一テスト
- ③研究期間 : 2018年から2021年の4年間
研究期間は4年生が1～4年の間、5年生が2～5年の間となる。
- ④結果比較 : 市内統一テスト2017年度の結果と2021年度の結果を比較する。

2. 研究の仮説

今回、比較対象として2017年度と2021年度の結果を用いた。年度が替われば、児童の特質等も大きく変わるので、安易に比較はできない。しかし、同地区や同年代、ほぼ同数の児童を対象にするので、比較した結果にある一定の示唆を得ることは可能と判断した。

今回目標とするのは、学校全体で取り組んだ研究内容が、学力向上に寄与するかを検証することである。児童の学力を向上させるためには、ある1つの方法を用いて成し得るものではない。年間を通じて様々な手立てが必要になると考え、以下8つの方法を用いた。

研究の仮説は、「校長をトップに、全校体制で8つの手立てを継続して行えば、市内の統一テストにおける平均点が向上する」とした。8つの手立ては表1に示した。

表1. 学校全体で取り組んだ8つの手立て

手立て①	校長をトップとして、「チーム学校」の雰囲気を作り上げる。
手立て②	各学年に学力テストの到達目標を設定する。
手立て③	到達目標達成のための「具体策」を設定する。
手立て④	校内研修で授業の10の原則や授業の型を学び、授業改善を図る。
手立て⑤	ICT機器を活用して授業改善を図る。
手立て⑥	統一テストの解き方に特化した授業を行う。
手立て⑦	全校体制で、教材文を読めない子をなくす。
手立て⑧	ICT機器を活用して家庭教育の充実を図る。

3. 研究の手立ての詳細

手立て①: 校長をトップとして、「チーム学校」の雰囲気を作り上げる。

以下、手立てを項目ごとに書いていくが、「チーム学校」として組織をまとめ上げることが、最も難しかった。校長を含めた管理職と学習指導主任・児童指導主任等のいわゆる学級担任を持たない教員がチームとなって、各学年との風通しを良くした。実際に児童に学習指導を行うのは各担任であり、担任のモチベーションを高めることを最優先とした。あくまでも心情的なことであるが、どのような良い計画を立てても、実践する人たちの意欲がなければ、「絵に描いた餅」に陥ることが危惧される。各人のモチベーションを高め

るための戦略として、「学年主任と連携を図る」「若手・中堅教員とのコミュニケーションをとる」の2つの方法を心掛けた。管理職には、「称賛」「承認」「労い」を常に職員に実施してもらった。具体的な方法として、職員会議や各打ち合わせの折に、本取り組みに対する言葉を必ず掛けてもらう。無担チームが心掛けたのは「雑談の中に研究を入れる」である。本研究に関することを研究会の時だけ話しても、実践が継続できない。雑談の中で、研究に関することを常に話題にしたり、相手からの相談を受けたりしながら、計画を日常的なものにしていった。

手立て②：各学年に学力テストの到達目標を設定する^③。

各担任のモチベーションを高める一環として、各学年の到達目標を設定してもらった。統一テストの結果を基に、次回への意欲付けとした。ポイントは2つある。1つ目は、目標値に数値を入れたことである。数値であるから、実際の結果と比較ができる。自分たちの取り組みに対して、「できた」「できなかった」ということが分かることも、意欲付けと考えた。しかし、「できなかった」という結果が多いと、やはりモチベーションは下がってしまうことが危惧された。そこで、2つ目のポイントとして、目標値をできるだけ低く設定することにした。ともすると「平均点を超える」や「5ポイント上回る」等の目標値を設定したくなるが、マイナスからの出発という現実を鑑みて、敢えて低く設定してもらった。結果が戻ってきた時に、目標値を達成もしくは限りなく近づいた結果であれば、自分たちの方向性は間違っていなかったという手応えを感じる。管理職の無担グループからも称賛の言葉が贈られる。人間関係を重視する組織なので、こういったささやかな承認が各担任の意欲を高めていく。結果的に、次年度は、本年度の内容を踏襲して、そこに少し手を加えていけば良いということになる。逆に目標値を達成できなかった、大幅に落ち込んでいたとなった場合、また一からやり直しということを考えなければならない。これでは各担任の意欲は高まらない。徒労感も多い。わずかな向上でもいいから、絶対に目標値を達成させることが重要であった。なお表2は、研究4年目に設定した目標である。毎年成績が向上し、平均点に「到達する」「超える」という表現が出るようになった。

表2. 各学年の到達目標

学年	教科	到達目標
1年	国語	「読む力」が市内平均と同程度になる力を付ける。
	算数	「思考・判断の力」が市内平均と同程度に力を付ける。
2年	国語	統一テストの「読む力」が、市内平均点に到達する。
	算数	統一テストの「数学的な考え方」が市内平均点に到達する。
3年	国語	文学的文章において、市内平均点と同レベルを目指す。
	算数	「円と球」「三角形」等の図形単元で内容を確実に定着させ、テストで市内平均正答率と同等を目指す。
	理科	「科学的思考・表現」で、市内平均点と同レベルに近づける。
4年	国語	「読む力」が市内平均点を超える。
	算数	「数学的な考え方」が市内平均点を2ポイント上回る。
	理科	「科学的な思考・表現」が市内平均点を超える。
5年	国語	「読む力」で市内平均点との差が-3ポイント以内になる。

	算数	「数学的な考え方」で、市内平均点との差が－5ポイント以内になる。
	理科	平均正答率が市内平均点と同レベルか、－1ポイント以内になる。
6年	国語	言語領域を市内平均点から－5ポイント以内にする。
	算数	情報量の多い問いに対し、必要な情報を選んで適切に活用し、問題解決することができる。
	理科	情報量の多い問いに対して、必要な情報を選んで活用することができ、市内統一テストで正答率50%を目指す。

手立て③：到達目標達成のための「具体策」を設定する。

到達目標を達成するには、日常的な取り組みが必要になる。毎時間行うことになるので、効果は高いと考えるが、それらは授業改善の核となる部分でなければならない。従って、各学年に慎重に検討してもらった。コンセプトは、「毎日、簡単にできることを粘り強く続けていく」である。これらを検討したところ、毎日続けるのであるから、授業の中でごく簡単にできて、学力向上につながる学習行為を行うこととなった。それは、問題文に印を付ける、キーワードを探す等、課題解決のために行うことである。これらは到達目標を達成するための「具体策」である。これを徹底して児童に習得させていこうとなった。問題内容をより深く認識するための技術的な学び方であり、単元や教科を横断して定着させることもねらいの一つとなっている。詳細は、以下の表3に示してあるが、どれも簡単な内容ではある。

表3. 各学年が設定した具体策

学年	教科	日常的に取り取り組む内容
1年	国語	教師の発問を明確にし、何を答えるのか理解させ正確に書いたり話したりさせていく。
	算数	問題を正しく読み取らせるため、大事な数字や言葉に線を引かせる。自力解決するための時間を確保する。その際に図に表す(場合によっては具体物を使う)ようにする。
2年	国語	日頃から言葉の意味を知る機会を設け、読み取りの力につなげる。
	算数	立式に必要な情報を読み取り、印を付ける習慣を付けさせる。内容に応じて考え方を図や文章にまとめさせ、思考を深めさせる。
3年	国語	文章中の文言を根拠として、中心人物の変化を正しく読み取らせる。
	算数	具体操作やデジタル教材・タブレット等を用いて、理解力を深めさせる。
	理科	単元毎にキーワードを使って性質や現象について説明させる。単元の学習内容が、生活の中でどのように生かされているか理解させる。
4年	国語	教科書の文章を手掛かりに登場人物の変化を正しく読み取らせ、主題に迫ることができるようにする。
	算数	正しい立式ができるように見通しをもたせてから考えさせる。
	理科	観察・実験の結果を基に、学習した内容を児童自身が説明できるようにさせる。

5年	国語	文章の叙述を基に考えられるように、根拠となる部分に線を引かせたり、丸を付けたりさせながら文章を読ませる。
	算数	数直線等を使って考え方を整理し、式を立てさせる。
	理科	情報量が多い問いに対して、必要な情報を選んで活用できるように、実験結果や考察は、キーワードを使って自分の言葉でまとめさせる。
6年	国語	学習を通して、自分が思ったこと等を言葉で表現できるように、書く活動を授業の中に設定する。
	算数	具体物や操作活動を多く取り入れ、数量や図形について実感を伴って理解させる。
	理科	実験に取り組みさせる際は、目的や方法、条件などをよく話し合わせる。更に実験結果や考察は自分の言葉でまとめさせる。

手立て④：校内研修で授業の10の原則^④や授業の型を学び、授業改善を図る。

本校は、毎年新規採用教員が2名あり、20代・30代の若い教員が多い。年齢が若いから一概に授業技能は低いとはいえないが、授業技量の底上げのために「授業改善」に特化した研修の場を放課後に設けた。内容は、授業の10の原則や各教科の特性を生かした授業の型を示すものである。以下、表4は、授業改善に向けた研修の主な内容である。

表4. 授業改善に向けた主な研修内容

国語	1 音読活動の仕方 「教師による範読トレーニング」「追い読みや交替読み等の音読バリエーションの練習」 2 漢字の指導の仕方 ^⑤ 「指書き、なぞり書き、空書き等の練習法」「ミニテストの活用法」 3 物語文の指導法 「登場人物・中心人物の見分け方」「視点の判別」「中心人物のエピソード分け」「クライマックスの検討法」「主題の確定法」 4 説明文の指導法 「問いの文と答えの文の見付け方」「文章構成の捉え方」「要約指導」「事実と意見文の判別法」「筆者の意見のまとめ方」
社会	1 教科書の活用法 「本文や各資料の扱い方」「資料は活動で読み取らせる方法」
算数	1 例題、練習問題、応用問題の捉え方 2 ジャンプ問題の解き方
理科	1 ノートの書かせ方 2 予想→実験・観察→記録→まとめ→考察という授業の流れ

授業の中で「めあて」「まとめ」「振り返り」を実践する。これらを形式的に行うのではなく、学力向上につながるような方法で行うことも研修内容に取り入れた。

表5. めあて・まとめ・振り返りにおける指導内容

項目	実際に教師が行う内容
めあて	1 本時に学習する内容を「～できる」という文末で提示する。

何を学ぶか	2 振り返りの段階で、設定しためあてについて、言葉で説明できるようにしようと励みます。
まとめ 何を学んだか	1 本時で学んだことを、教師が短くまとめて、児童に提示する。 2 内容を教師と児童で確認し合いながらまとめていく。
振り返り 何を覚えたか	1 各教科とも、言葉によるアウトプットを促し、学んだ内容の80%以上を全員に捉えさせる。 2 算数においては、ミニテストを行い、定着率を図る。 3 ミニテストの結果、正答率が半数に満たない場合は、別途指導法を考え、全員定着を目指す。

まとめの段階において、児童が視覚的に捉えられるサイト等を作成して、児童に提示する。その際、穴埋め等の工夫をすることで、児童の意欲付けを図っていく。これらの研修を月1～2回のペースで行い、全体の指導力向上に努めてきた。

手立て⑤：ICT機器を活用して授業改善を図る。

2021年に「一人一端末」が実施され、端末を活用した授業実践が全国で行われるようになった。本校は市教育委員会の指定による2018年から2年間「ICT導入モデル実践校」、2020年から2年間「ICT教育推進校」に指定された^⑥。教材教具のサポートを受けたり、先進校を視察できたり、様々なサポートを受けることが可能になった。それまで教科書を活用して授業を行ってはいしたが、大変非効率的な行為が散見された。例えば、本時の学習内容に関するページを開かせたいのだが、全員がページを開くまでかなり時間が掛かり、その間、教師は全員が開くまで待ち続け、実際に授業の本題に入るのは、授業開始から5分後だったという事例もあった。ICTを活用することで、こういった無駄を省くことが可能になった。それらの詳細を見ていく。

まずは、研究指定校としての取り組みであるが、教育機器等の提供への見返りとして、担任の全員が授業を公開することが教育長から指示された。2年間で3回公開授業日が設定された。ICT機器の活用後ろ向きであったベテラン群も、人に授業を見られるということで、重い腰を上げることとなった。当初、全員が授業を公開することに異論を唱える教師もいたが、教育委員長の指示であり、校長からの命令事項ということにもなった。ここでも「チーム学校」としての意識を高めるために、人間関係を良好に保つ配慮としてベテラン・若手に対して配慮ある言葉掛けが必要になった。例えばベテランに対しては、「ICT教育は今始まったばかりです。多くの人が、何をしたいか分からない状態なので、やるならできるだけ早いうちに、公開しよう」と投げ掛けた。これにより率先して公開授業に立候補するベテラン教師が現れた。若手に対しては、「これからICT教育は必須です。今後、新たな学校に赴任した時に、その学校の中心教員になれるぐらいの知識と技能を得ておきましょう。そのためには率先して授業に取り組んだ方がいい」と励ました。元来、モチベーションの高い若手教師が多くいたので、公開授業に対する取り組みに問題は見られなかった。このようにして行われた当該市指定の3回にわたる公開研究授業には、市内の小学校・中学校の全員が3回のいずれかに参加することとなり、各回とも活況を帯びた。研究指定校であるから、ICT機器を前もって配布していただき、それらを活用しての効果的な学習内容や機器操作の不具合等を報告することになった。提供していただ

いたのは、電子黒板とデジタル教科書であった。電子黒板は、特別教室も含め、すべての教室に配置された。それまでは、教科書をデジカメで撮影し、プロジェクターを活用して黒板に投影して使っていた。それが電子黒板となり、かなり使い勝手が良くなった。さらにデジタル教科書もす全教科が配布され重宝した。先に示した教科書がなかなか開けない児童に対しては、電子黒板に教科書を提示すれば、自分の教科書を開かなくても授業に入ることができ、授業時間をフルに活用して指導をできることが増えてきた。

国語における漢字の書き順を動画で学んだり、算数の図形単元では画面上で図形を変形させたりすることが可能になり、学力低位の児童にとっても分かりやすい学習を行うことができるようになった。ICT 導入モデル実践校の研究指定最終年度の 2019 年度末、各教師に行ったアンケートにも、ICT 機器を活用して効果があった内容として挙げられていた。

表 6. ICT 機器を活用した効果に関する教師の意識

質 問 内 容	肯定的	否定的
①電子黒板（デジタル教科書）やタブレット端末は、児童・生徒の学習意欲を高めるために効果的だと思うか。	100%	0%
②電子黒板（デジタル教科書）やタブレット端末は、児童・生徒の学習への理解を深めるために効果的だと思うか。	100%	0%
③電子黒板（デジタル教科書）やタブレット端末は、児童・生徒の表現や技能を高めるために効果的だと思うか。	96%	4%
④電子黒板（デジタル教科書）やタブレット端末は、児童・生徒の思考を深めたり広げたりするために効果的だと思うか。	96%	4%
⑤電子黒板や、児童・生徒用タブレット端末を利用するための教材等の準備は、負担ではないと思うか。	48%	52%
⑥これまでの授業の中での、電子黒板（デジタル教科書）や教師用タブレット端末の活用頻度はどうか。	96%	4%
⑦これまでの授業の中での、児童・生徒用タブレット端末の活用頻度はどうか。	15%	85%

電子黒板やタブレット端末の使用に関して、全般的に肯定的な意見が多く見られた。特に学習意欲や学習への理解などでは、全教員がその効果を認めている。デジタル教科書で教材を示すと、児童はどの部分を学習しているか視覚的に捉えることができる。全員が集中した状態で学習を進めることが可能になり、学力向上に大いに寄与していると考えられる。更に、まとめや振り返り活動においても、本時の学習内容を繰り返し提示することができ、確実な定着を図ることにつながっていた。また、教材に関する写真や動画、関連する資料が豊富にあり、それらを簡単に表示することができる。これらを見せると、教材に対する児童の興味や関心を高めることができ、学習に意欲的に取り組む児童が増えてきている。これらのように、電子黒板や教師用タブレット端末の利便性を教員はとても感じており、その結果⑥のように、電子黒板や教師用タブレット端末の使用頻度は、96%と非常に高い数値を示している。更に、発表技能を高めたり、思考を深めたりすることにも効果があると回答している教員が 96%もいることから、これらの ICT 機器の活用が主体的・対話的で深い学びを実現する上でも効果があるという示唆を得ることができた。

反面、児童用のタブレット端末を利用する際の教材等の準備に負担感を感じている教員が半数以上いる。併せて児童用のタブレット端末の使用頻度も肯定的に感じている教員は15%に過ぎず、大変低い数値である。これらの原因の主たるものは、児童用タブレット端末の数が少ないことが挙げられる。一人一端末が導入された2021年6月まで、児童用タブレット端末は、パソコン室に常備されていた。これらを使用できるのは、週1時間の総合的な学習の時間に限られてくる。教室で使用する場合、パソコン室の使用割り当てになっている学級との調整が必要になる。調整が成功しても、事前に持ち出すことができず、教材研究に使用することができない状況にある。教員への自由記述を見ても、「児童一人一人にタブレット端末を使用させたくても、授業の割り振りのときでないと難しいため、使いたい場面で活用できない。」「少ないタブレット端末を学校全体で使うので、準備に時間がかかり、使用に負担を感じている。」という意見が多くあった。また、通信状況により、機材トラブルが生じることもあり、通信環境の改善が必要と感じている教員も多かった。

ICT機器を用いた授業を展開したことについて、児童の意識を以下に示した6項目についてアンケート調査を行った。それぞれの項目については、「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の4段階で回答を得た。「とてもそう思う」「少しそう思う」を肯定的意見、「あまり思わない」「まったく思わない」を否定的意見としてまとめた。なお、⑥は「まったく思わない」「あまり思わない」を肯定的意見とした。

表7. ICT機器を活用した授業に対する児童の意識

質 問 内 容	肯定的	否定的
①電子黒板やタブレットを使った授業は、使わない授業と比べ分かりやすいか。	95%	5%
②電子黒板やタブレットを使った授業では、使わない授業と比べ、学習問題の解決に向けて、自分で考え、進んで取り組むことができていると思うか。	90%	10%
③電子黒板やタブレットを使うと、使わないときと比べて、グループやクラス全体での話し合いが活発になったか。	88%	12%
④電子黒板やタブレットを使うと、使わないときと比べて、図や資料を活用しながら、自分の考えを伝えたり、説明したりしやすいか。	88%	12%
⑤電子黒板やタブレットを使うと、使わないときと比べて、友達の説明は分かりやすいか。	95%	5%
⑥電子黒板やタブレットを使った授業に不安なことはあるか。	85%	15%

アンケートの結果、全体を通して、肯定的な意見が9割近くあった。①については、95%と高い割合で、電子黒板やタブレットを使った授業の方が、使わない授業よりも分かりやすかったと答えている。これは、デジタル教科書によって、国語の物語教材に出てくる場面や動物などを映像で見たり、算数の図形を動かしたりできるので、より分かりやすく感じたと考えられる。②については、9割の児童が自分で考えて、進んで取り組むようになったと答えている。教材を視覚的に捉えられることが効果的だったと思われるが、他

にも例えば理科の実験の仕方を十分理解した上で実験活動を行ったり、体育において動画を利用した授業展開など、初めて体験する学習活動があったりしたので、児童の意欲が高まったのだと考えられる。③についても、9割近い児童が肯定的な回答をしている。グループ学習において、児童が話し合ったことをまとめる際に、ミライシード[®]のアプリを利用している。各班がまとめたことを全体で簡単に共有でき、他班との意見の相違点や共通点が捉えやすかったことも影響していると考えられる。これまで模造紙や画用紙を用いて、書いた文章などを読み上げるという発表が多かったが、電子黒板やタブレットを活用することで、画像や動画を簡単に用いることができるようになり、よりビジュアルに発表するようになった。このことで、これまでの発表よりも、より詳しくより分かりやすくなったと感じている児童が多い。そのことから、④及び⑤の間に対して、多くの児童が肯定的な回答をしていると考えられる。⑥では、不安に思っている児童が15%しかなく、これは幼いときからデジタル機器に触れているということも影響していると思われる。事実、タブレットの操作に初めは戸惑いを見せていた児童も、短時間で操作に慣れていたことから分かる。教師と児童のタブレット活用能力が向上したことから、授業においても積極的に端末を活用するようになった。例えば、ミライシードのオクリンクやムーブノートを活用して、児童の意見を素早く集約して、話し合い活動を活発化させた。ただし、一人一端末の端末配備が完全に終了したのは、研究4年目の6月頃だったので、担任の端末指導の習熟度に差があり、学級間の活用頻度にも差が生じた。そのため、ICT支援員に端末を活用した授業実践事例等を紹介する研修会をお願いした。支援員は外部団体の職員であるため時間に制約があったが、毎月1回の定期研修会及び夏季休業中の特別研修会を行うことができた。

手立て⑥：統一テストの解き方に特化した授業を行う。

今回、比較するテストは、市内統一テストになる。これは文部科学省が行っている全国学テを踏襲した内容となっている。日常的に使用されるテストは、いわゆる市販テストであり、全教科で用紙1枚の表裏に印刷されたものである。しかし、全国学テはページ数が多く、問題が数ページに渡って記されている。通常体験しないテストであり、学力低位の児童はページをめくるたびにやる気をなくす傾向にあった。それは、問題の後になるほど、答えを書かない児童が増加していることから推定された。時間がなくて、最後まで終わらない児童も存在するが、あまりの問題数の多さに途中であきらめてしまうという児童も見られた。このような事態を避けるために、多くの場所で行き入れられている方法が、過去問に取り組みさせることである。大量に印刷された過去問を与えられても、児童の意欲は向上しないし、正答率も上がらない。過去問への取り組み自体は悪いことではないが、解き方の指導がなされていない。印刷した問題を渡すだけでは、児童は解き方が分からず、結果、不正解が多くなり、意欲も減退してしまう。重要なことは、「解き方指導」である。そこで、本校では、筆者が飛び込み授業として年間2～3回ずつ、全国学テに特化した授業を各学級で行った。教科は国語とした。しかし、飛び込み授業では回数に制限がある。担任も一緒に授業を受けてもらい、全国学テ対策に対応した指導法を学び、その後、担任学級において継続的に指導をしたもらうことにした。

最初に用いた教材は『答え方スキル』^⑧である。本教材を用い徹底指導したのは、問題には「リード文」「教材文・資料」「問題」の3つに分かれることである。その後設問があるが、設問に示されている資料は、複数ページにまたがっている場合もあり、どの資料を把握しなければならないかが分かりにくい。そこで、答え方スキルの手引書にあるように、設問内の資料名と各資料を線で結ぶ等の作業を通して、資料の把握をさせた。

次に用いた教材は、全国学テの国語問題である。ここでは2021年に行われた全国学テ^⑨の「面ファスナー」^⑩問題を取り上げる。この問題では、(1)教材文の内容を読み取る技能、(2)答えの型を見付ける技能、(3)キーワードを見付ける技能、(4)要約する技能の4つの定着を目指して授業をした。

(1)の内容を読み取る技能であるが、テスト中に教材文を読む回数は、多くても2回であろうと推定して、なるべく1回の黙読で大体の内容を掴ませるようにした。その手立てとして「主語」と「述語」を対応させながら読ませる。主語と判断した言葉に印を付け、その述語にも印を付けさせる。こうすることで、一文の意味がつかみやすくなる。さらに、具体物が出てきた場合、本教材の場合は「面ファスナー」や「新幹線のヘッドレスカバー」等になるが、経験差はあるものの、なるべく知っている具体物が出てきた瞬間に実物をイメージさせた。

(2)の答えを見付ける技能は、設問の中に答えの型が書いている文を見抜く力を身に付けさせることになる。このような設問は、全ての問題に記されているわけではないが、「設問の中に答えの型が書いてあることもある」ということを意識付けるために行った。例えば本問題であれば、設問の中に「メストラルは、何をヒントに、どのような仕組みの面ファスナーを作り出しましたか。」と書かれている。この文の型が答えになるので、最後の「か」を省き、「何」と「どのような」の部分について教材文から探し出し、挿入させれば答えが完成する。答えの主語は「メストラルは」になり、書き出しが分かれば鉛筆がスムーズに進む児童も多い。

(3)のキーワードを見付ける技能と(4)の要約する技能は、一朝一夕には育たない。繰り返しの指導が必要になるので、例えば社会科の教科書を扱う場合でも、キーワードを見付けさせたり、インタビュー記事などを要約させたりする。いわゆる教科横断型になるが、あらゆる教材で変化を付けて繰り返し指導することを担任にお願いした。

全国学テ形式の問題では、字数制限が設けられる場合がある。例えば「50文字から80文字の範囲で書く」という条件になるが、児童の多くは50文字より80文字の方が良い点数になると思っている。しかし、50文字も条件をクリアーしているので、80文字に近いからといって加点されることはない。他の条件をクリアーすれば、おのずと制限文字内に入るということも指導した。文字制限を無視することができれば、児童が感じる心理的プレッシャーも軽減させることに繋がると判断した。

手立て^⑦：全校体制で、教材文を読めない子をなくす。

児童を成績順に並べ、上位から4つに区切る。上位25%をA層とし、以下B層、C層、D層と区分する。このD層児童の音読能力を観察するとある傾向が見えてきた。それは、漢字どころか平仮名や片仮名の読みもたどたどしいことである。学級で音読をさせても、口パクで周りの子に合わせて読んだふりをしている児童も見られた。全国学テに代表され

るように、現在の学力テストは国語に限らず、算数でも長文の問題がある。問題が読めなければ、正答を導き出すことはほぼ不可能となる。問題文をスラスラ読める児童を育成するためには、低学年からの底上げが必要になる。

そこで、「平仮名・片仮名が正確に読め、書ける」「当該前学年までの漢字が読める」「特殊音節が読める」「視知覚能力を高める」という4つの目標を掲げ、4年間の長期計画を立てて、全校体制で取り組んだ。計画は次のように進めた。

まず、全校児童の読みに関する実態を明らかにするために、MIM-PM[®]によりアセスメントを2種の教材を用いて行った。つまりきが潜在化している児童を把握して、全校的な支援を施していく。1つ目は、イラストが示す言葉を正しく選択できる能力を試す。例えば猫のイラストを示し、その下に「わこ・ねこ・ねい」と選択肢を設ける。このような設問を清音、濁音、半濁音、長音、促音、拗音、片仮名の7種類5問ずつ示し、制限時間1分以内で行わせる。2つ目は、逐語ではなく、言葉を視覚的なまとまりとして素早く認識する力を試す。例えば「いぬはないちご」と示された言葉に、2本の線で3つの言葉「いぬ」「はな」「いちご」と分ける。これも先の7種類の分類で行う。全学年で予備時間に実施する。採点は担任が行い、結果を名簿に入力する。それを基に校内特別支援委員会を開催し、漢字や視知覚能力等、それぞれの弱みをもつ対象児童を確定し、弱みごとにグルーピングする。本校には、毎朝15分間の「読書・自習タイム」を行っている。週2回の自習時間に対象児童を取り出し、無担が特別教室を利用して弱みを克服する学習を行う。児童の取り出しについては、保護者の了承を得て行った。私は、前年までの漢字の読み定着と視知覚能力の向上を目指す児童を担当した。毎回、結果を記録(図1)し、検討を加えて次の教材を準備する。視知覚能力強化には、「どこどこシート」(写真1)[®]を公費で購入し活用した。

氏名	実施日	結果	備考
山田 太郎	10/1	5/5	
田中 花子	10/1	4/5	
佐藤 健一	10/1	5/5	
鈴木 美咲	10/1	5/5	
高橋 誠二	10/1	5/5	
伊藤 莉子	10/1	5/5	
渡辺 拓也	10/1	5/5	
山崎 明日香	10/1	5/5	
中村 大輔	10/1	5/5	
小林 千尋	10/1	5/5	
松本 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	
森田 龍之介	10/1	5/5	
山口 莉奈	10/1	5/5	
斎藤 光希	10/1	5/5	
高木 遥斗	10/1	5/5	
橋本 結衣	10/1	5/5	
吉岡 大輔	10/1	5/5	
山本 千尋	10/1	5/5	
村上 悠太	10/1	5/5	
石川 舞	10/1	5/5	
木村 隼斗	10/1	5/5	
水野 結衣	10/1	5/5	

役に立った。また、難易度の高い問題も提供され、児童の挑戦意欲を刺激する家庭学習を
実践できた。

Ⅲ. 研究の結果

1. 比較の方法

対象テストは当該小学校のある自治体が行う統一テストとし、比較項目として「達成
率」を採用する。対象児童は、当該公立小学校の4年生と5年生で行う。

研究前は、2017年度4年生（94名）・5年生（96名）であり、研究後は2021年度4年
生（78名）・5年生（81名）となり、研究後の児童は2017年から2021年の4年間8つ
の手立てを施された。4年生が1～4年生、5年生が2～5年生の期間となる。

2. 研究前の2017年度の達成率

2017年度の4年生と5年生の市内統一テストの達成率の結果は、以下である。

表 8. 2017年度（研究以前）の4年生の市内統一テストの結果

教科	国語	算数	社会	理科
市内平均点	72.6	71.3	53.8	71.8
当該公立小学校	76.6	70.2	40.4	68.1
差	+4.0	-1.1	-13.4	-3.7

2017年度4年生は、国語は市内平均達成率より4ポイント上回っている。しかし、他3
教科においては平均達成率を下回っており、特に社会化においては13.4ポイントも下回
っており、厳しい結果となった。

表 9. 2017年度（研究以前）の5年生の市内統一テストの結果

教科	国語	算数	社会	理科
市内平均点	66.2	60.2	56.8	67.1
当該公立小学校	60.0	48.4	55.2	62.5
差	-6.2	-11.8	-1.6	-4.6

2017年度の5年生は、4教科全てにおいて市内平均達成率を下回っている。5ポイント
以上下回ったのは国語と算数で、算数は11.8ポイントと大きく下回っていた。

3. 研究後の2021年度の達成率

2021年度の4年生と5年生の市内統一テストの結果は、以下である。4年間に渡り、全
校体制で8つの手立てを受けてきた結果が、以下の表となる。

表 10. 2021年度（4年間の研究後）の4年生の市内統一テストの結果

教科	国語	算数	社会	理科
市内平均点	71.7	80.9	67.1	77.0
当該公立小学校	78.1	86.3	71.2	79.5
差	+6.4	+5.4	+4.1	+2.5

2021年度の4年生は、4教科全てにおいて市内平均達成率を上回っており、5ポイント
以上上回ったのは国語と算数の2教科であった。

表 11. 2021年度（4年間の研究後）の5年生の市内統一テストの結果

教科	国語	算数	社会	理科
----	----	----	----	----

市内平均点	71.2	63.7	58.7	72.9
当該公立小学校	76.6	68.8	67.5	83.1
差	+5.4	+5.1	+8.8	+10.2

2021年度の4年生は、4教科全てにおいて市内平均達成率を5ポイント以上上回った。理科においては、10.2ポイントと大きく上回ることができた。

表8から表11に示された各教科の平均達成率の差について相関関係を調べたところ、「4年生=0.56」「5年生=0.62」となり、ともにピアソンの積率相関係数において「かなり相関関係がある」と示された。

また、「市内平均達成率の向上と学力向上の8つの手立ては、無関係である」という帰無仮説を立て、等分散を仮定した2標本によるt検定を行った。今回は片側検定を採用した結果、p値は「4年生=0.0363」「5年生=0.0008」となった。この結果、両学年とも有意水準の0.05を下回っていたので、それぞれの数値に有意差が認められた。よって帰無仮説は否定され、対立仮説である「市内平均達成率と学力向上の8つの手立ては関係性がある」ということが支持された。

4. 2017年度と2021年度の達成率の比較

2017年度と2021年度の平均達成率の伸びを比較すると、次の表になる。

表12. 2017年度（研究前）と2021年度（研究後）の達成率の伸びの比較

4年生	教科	国語	算数	社会	理科
	2017年度	+4.0	-1.1	-13.4	-3.7
	2021年度	+5.4	+5.1	+8.8	+10.2
	伸び	+1.1	+6.2	+22.2	+13.9
5年生	教科	国語	算数	社会	理科
	2017年度	-6.2	-11.8	-1.6	-4.6
	2021年度	+5.4	+5.1	+8.8	+10.2
	伸び	+11.6	+16.9	+10.4	+14.8

研究のスタート時では、4年生の国語以外、市内平均達成率を下回っていたが、4年間の研究の結果、全ての教科で市内の平均達成率を超えることができた。冒頭にも述べたように、児童が違うので簡単に比較ができないことは十分承知をしている。しかし、同年代で生活圏も同じ児童において、これほど結果が向上したことは、本研究において実施した8つの手立てが、学力向上に対して大いに寄与したと判断した。

5. 4層構造^⑩における平均点の比較

2017年度と2021年度は、学習指導要領の改訂に伴い観点が変更になり、観点について比較することはできない。今回は、2021年度の知識・技能と思考力・判断力・表現力についての4層構造の分布を分析する。

表13. 2021年度（研究後）の4年生の教科別4層構造分析

	知識・技能				
	A層	B層	C層	D層	A層-D層の差
国語	95.7	90.7	78.9	61.7	34.0

算数	97.0	91.0	82.0	64.8	32.2
社会	92.9	79.4	63.5	42.9	50.0
理科	93.3	83.1	71.3	55.6	37.3
	思考力・判断力・表現力				
	A層	B層	C層	D層	A層-D層の差
国語	85.5	70.9	59.9	41.9	43.6
算数	95.8	90.3	76.3	56.9	38.9
社会	81.7	61.1	41.1	19.0	62.7
理科	97.2	86.1	71.1	52.8	44.4

まず、4年生の4層構造を分析する。「A層-D層の差」に着目して、50ポイント以内を目指してきた。その点を考えると、知識・理解、思考力・判断力・表現力ともに社会科以外は、50ポイント以内を達成しており、低位層の底上げができた判断した。平均点を高める場合、この低位層の学力が高まることポイントになる。例えば、A層である上位の25%の児童の平均点が90点と仮定すると、最大限向上しても10ポイント止まりとなるが、D層である低位の25%の児童の場合は大幅な点数の向上も理論上可能になる。今回の研究の目的は、市内統一テストの平均点向上にあるので、低位層の向上は結果に大きく反映される。その点で、A層とD層の差が30ポイント台となった知識・技能の国語・算数、理科、思考力・判断力・表現力の算数は、研究の成果が十分に見取ることができる。

ただし、課題も見えてきた。社会科では、知識・技能が50ポイント、思考力・判断力・表現力に至っては62.7ポイントの開きがあり、社会科における底上げが急務となっていると同時に、上位層の点数も他の教科に比べて劣っている点も検討が必要になる。

表 14. 2021年度（研究後）の5年生の教科別4層構造分析

	知識・技能				
	A層	B層	C層	D層	A層-D層の差
国語	93.3	85.6	71.8	47.4	45.9
算数	96.8	88.4	74.6	51.2	45.6
社会	93.1	81.7	67.9	45.2	47.9
理科	97.4	91.1	81.6	56.9	40.5
	思考力・判断力・表現力				
	A層	B層	C層	D層	A層-D層の差
国語	83.1	70.3	61.1	47.4	35.4
算数	77.2	64.9	42.5	14.9	62.3
社会	79.7	65.4	52.6	32.3	47.4
理科	88.9	67.4	50.0	33.2	55.7

5年生の4層構造では、知識・技能において、A層とB層の全てが80ポイントを超えており、上位層の習熟度が高い。加えては全ての教科で40ポイントを下回っていたことから、低位層と上位層との差が少なく、低位層の底上げが成されたことが分かる。

しかし、思考力・判断力・表現力においては、A層が90ポイント、B層が80ポイントに達しておらず、上位層の定着に難が見られる。それに加えて算数と理科においてA層とB層の差が50ポイントを超えており、この観点に関する学力向上は再検討が必要である。

IV. 考察

4年間の研究の結果、市内統一テストの市内平均点を超えるという目的は達成された。この研究は、学習指導主任である筆者が提案した内容を職員会議や研修において、管理職を含む教職員の理解を得て実践されたものである。教職員全員が、一つの方向に向けて一丸となって取り組む、いわゆる「チーム学校での取組」というのは、聞こえは良いが、実際にやってみると大変難しいものであった。上司と部下、無担任と担任団、主任と平という具合に、大人同士の関係の中には、必ずそれぞれの立場の違いが生じてくる。それらを超えて、教職員が児童の学力向上という目的に向けて取り組んでくれたのは、校長・教頭等の管理職の職員への対応がポイントだったと感じている。本研究は、8つの手立てを4年間継続して行ってきたが、実際に児童に施すのは担任である。年度末に、本研究への取り組みを自己評価してもらっていたが、結果から各自が真摯に取り組んでいると判断できた。また、異動してきた教師や新規採用の教師に対しても、前年から実施してきた教師が説明をしながら、仲間としてすぐに研究に加わってくれた。これらのことは、児童の学力を向上させたいという願いの表れであろう。

各学年が到達目標を立てたのは、授業改善に向けた取組に対して、判断材料として統一テストを活用してほしいからである。到達目標は曖昧な表現ではなく、なるべく数値を用いてターゲットを明確にしてもらったが、これを達成するには毎日の授業の中で「学び方」を指導する必要がある。問題文に線を引くや主語・述語を明確にする等、ささやかな方法であるが、これらを確実にやってきたから目標値に到達することができた。毎日の地道な取り組みが大切なことを改めて認識した。

ICT機器を活用した授業で、児童は学習内容を視覚的に捉えることができるようになり、以前に比べて集中して取り組むようになった。教科書すらなかなか開くことができなかった児童に、電子黒板を用いると本時にやるべきところをすぐに提示できる。担任には、電子黒板等を十分活用してもらうために、「朝来たら、すぐに電源を入れる」という言葉を合言葉にして取り組んでもらった。2022年現在、電子黒板や端末を使った授業は目新しくはないが、2018年の導入当時は電源の入れ方も分からない教師がいたほどである。今回の学力向上の最大のポイントは、ICT機器を十分活用した授業にあると考えている。研究後の教員アンケートでは、「電子黒板やタブレットの電源を常に入れておくことで、教員自身がICT機器を十分に活用し、児童の学力向上を達成しようという意識が高まった。」「『発表・ノート』アプリを活用することで、個人が考えた意見やグループ活動でまとめた内容等を、全体に広げることが可能になり、学習課題や内容の共有化が図られた。」等の授業実践への効果をあげていた。

文献

- 1 向山洋一（2015）：新版授業の腕を上げる法則、9～62、学芸みらい社
- 2 文部科学省（2018）：小学校学習指導要領（平成29年告示）、東洋館出版

- 3 松崎力 (2017) : こうすれば授業がうまくいく! 授業の 10 の原則、オールインワンガイド編集部「ポイントがわかる教師の仕事オールインワンガイド」、18~19、東京教育技術研究所

注

- ① 市内統一テストは、年間 2 回行われる。春の全国学テ (6 年) ・県版学習状況調査 (4 ・ 5 年) と同日に 3 年生が実施。2 回目は秋頃に行われ、3 ~ 6 年が実施している。今回の対象テストは 11 月に実施した 2 回目テストとなる。
- ② 当該県教育委員会では、県内の児童生徒一人一人の学力向上を図るために、2014 年度から学習状況調査を実施している。
- ③ 到達目標の設定に関しては、当該県が実施している学力向上支援事業で実施された校内研修にて、実施することが確定した。
- ④ 授業の 10 の原則は、1 から順に趣意説明、一時一事、簡明、全員、所・時・物、細分化、空白禁止、確認、個別評定、激励の原則である。
- ⑤ 漢字の習得法や算数の指導法に関しては、民間教育団体である TOSS が提唱している指導法を参考に研修を行った。https://www.toss.or.jp/ (最終閲覧日 2022 年 8 月 26 日) 教材は、光村教育図書から発刊されている『あかねこ漢字スキル』『あかねこ計算スキル』を活用した。
- ⑥ 当該市の第 11 次市勢発展長期計画増補版において、「こどもの元気な成長プロジェクト」の施策の一つとして、ICT を活用した学校教育の推進が明記され、教育委員会が主導して実施された。
- ⑦ ミライシードは、Benesse が提供する端末を活用した学習用ソフトであり、授業支援 (オクリンク) 、ムーブノート (協働学習) 、ドリルパーク (個別学習) 等がある。当該市教育委員会と提携し、実施されている。
- ⑧ 『答え方スキル』は、教材会社の正進社から提供されている。国語の記述式問題を克服する指導法が明確に示されている。公費により毎年 4 年生以上で実施してきた。
- ⑨ 文部科学省が 2007 年度から実施している。小学校 6 年生と中学 3 年生を対象に実施し、学力と学習の状況を調査している。
- ⑩ 「面ファスナー」問題は、2021 年度の 6 年生国語の大問 2 にあり、目的に応じ、文章と図表とを結びつけて必要な情報を見付ける能力を図る内容である。
- ⑪ MIM-PM (Multilayer Instruction Model-Progress Monitoring) は、海津亜希子によって提唱された。学習進化によりつまづきが顕在化する児童を、前の段階で把握し指導につなげていくためのアセスメント。全ての学習領域に影響し得る早期の読み能力、特に特殊音節を含む語の正確でスムーズな読みに焦点を当て実施する。
- ⑫ 騒人社から発刊されている『アタマゲンキどこどこ』のシート版である。ホワイトボード用マーカーで繰り返し活用でき、ワーキングメモリが鍛えられるとされている。
- ⑬ 4 層構造とは、児童を正答数の多い順に整列させ、人数に率により 25% 刻みで 4 層に分け、上位から 1 番目を A 層、2 番目を B 層、3 番目を C 層、4 番目を D 層としたものである。